

13

柴田 幸雄

最近史料が多くなり図書館などに保管できないため廃棄されているのが多くなっています。停年退職された教授の蔵書でも、昔は京都大学の様にすべて保管されている様ですが、整理が出来なくなってきたときいています。古い教科書でもそれなりにいいことが書いてあるのが多い様です。

私の専門生化学でも、非常に身近な本で、古武弥四郎先生の「養素と酵素」市原硬先生の「医化学提綱」久保秀雄先生の「生物物理化学」「酸化還元電位」東大、橋田邦彦先生の「生理学」他、兒玉先生の「有機化学生化学」岡島先生のドイツ語と併記された「解剖学」西先生の「比較解剖学」などあげればきりがありません。又これらの先生がお持ちになっていた書物などもみたいと思います。し大学によって全く残っていないことが多いと思います。しかし残しておく場所もなく困った事と存じます。私のおつた米国ウイスコンシン大学では、多くの本や雑誌を「マイクロフィルム」にして保存している様です。私の専門ではありませんが、「アメリカインディアン語」のマイクロフ

ィルムを持って帰りましたが、図書館に、これをよむ装置がないため「宝のもちぐされ」になっている次第です。最近雑誌も多くなり、又新しい雑誌が大判になり、非常に立派な表装ですが、少し水にぬれると雑誌の各ページがひっついてしまい、はなす事もむづかしい事が多くあります。前に医史学会でも発表させていただきましたが、殊に地理と生物の教育が問題であり、一時「横観有機化学」などの本がでたり、「臓器別教育」が言われましたが「ウロジ」も必要といわれました(Physiologyなど)高校生物も完全に「分子生物学的」になり、分類的な教育がなおざりにされたりしています(Biologyは分子生物学的ですがZoologyは分類的な博物学がある様に思います)これも戦後の急な変化からと思います。

14

杉田 暉道

わが国の医史料の情報は、外国に比較すると、その公開程度は十分とはいえない。小生の経験では、医史学の研究を始めた頃、あることについて探索しようとした時、それに関係した資料を持っている人が、その資料を見せても